



県内の全交番に救急医薬品を補充

～県民の安全安心のため兵庫県警察施設へ AED の設置を新たに開始～

5月20日、兵庫県警察本部地域部長室において救急医薬品とAED（自動体外式除細動器）委託式を行い、兵庫県支部事務局長から兵庫県警察本部地域部長に目録が手渡されました。

兵庫県支部では、兵庫県警察との共同事業として、昭和33年から「街角の赤十字」として、交通事故その他負傷者の応急手当に使用していただくため、兵庫県下の全交番・駐在所に救急箱を設置。平成22年度は451件の活用が兵庫県警察から報告され、県民の皆さんの応急手当に効果をあげています。

また、今年からは心肺停止例の救命率向上のため、兵庫県警察のご協力により、7ヵ年計画で合計140台のAEDを、県内の警察施設に設置することになり、今年度は、兵庫県警察本部、運転免許試験場や更新センター、西播磨管内の警察署などに16台を設置しました。これからも、県民の皆さまのさらなる安心・安全を



兵庫県警察本部エントランスに設置されたAED

図るため、救急医薬品の補充とAEDの設置を行ってまいります。

ひょうごの 赤十字

2011 6月1日



Contents

特集

発災から三ヶ月。さらなる支援活動へ。

救護班からの活動報告

- 姫路赤十字病院 ● 神戸赤十字病院 ● 柏原赤十字病院
- 多可赤十字病院 ● 姫路赤十字看護専門学校

● その他の事業

● 講習のご案内

● 日本赤十字社に寄せられる国内災害の義援金が被災された方々へ届くまで

日本赤十字社 兵庫県支部
Japanese Red Cross Society
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-4-5
tel. 078-241-9889 fax.078-241-6990
URL <http://www.hyogo.jrc.or.jp/>

講習のご案内

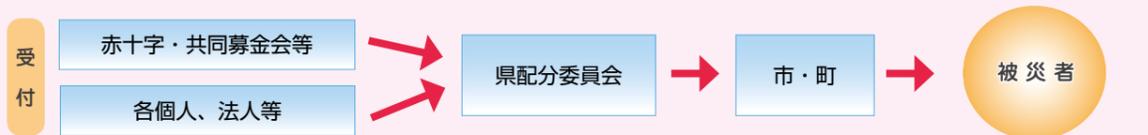
内容	開催日
救急法救急員養成講習	9月10日(土)・11日(日)
救急法基礎・救急員養成講習(セット講習)	8月2日(火)・3日(水)・4日(木)
水上安全法救助員養成講習Ⅱ(海講習)	9月3日(土)・4日(日)・10日(土)
健康生活支援講習	8月17日(水)・24日(水)・31日(水)
幼児安全法支援員養成講習	7月23日(土)・24日(日)・30日(土)

- 開催場所は、いずれも日本赤十字社兵庫県支部(水上安全法救助員養成講習Ⅱを除く)。
詳細及びその他の講習についてはホームページ <http://www.hyogo.jrc.or.jp/> まで

日本赤十字社に寄せられる国内災害の義援金が被災された方々へ届くまで

東日本大震災では、日本赤十字社へ2,000億円を超える義援金が寄せられました。(6月1日現在)お預かりした大切な義援金は、このようにして被災者の方々に届けられます。

赤十字で受け付けた義援金は国又は都道府県への寄付として取り扱われ、赤十字で配分する事はできません。配分は被災都道府県に設置される義援金配分委員会が市町村を通じて行われます。



◎赤十字にお寄せいただいた義援金は、義援金募集事務及び赤十字活動には一切使用していません。



東日本大震災に
対する取り組み

発災から三ヶ月。さらなる支援活動へ。

兵庫県支部では東日本大震災発生直後から、岩手県釜石市教育センター横の鈴子広場に、エアertentによる仮設診療所を立上げ、医療救護活動を展開しました。

1ヶ月後の4月11日からは、岩手県山田町内最大の避難所となった「岩手県立山田高等学校」に活動拠点を移し、医療救護活動を続けました。

長期に渡り不自由な上、ストレスの多い避難所生活を余議なくされた被災者の皆さんのために、4月30日からは「こころのケア専門チーム」も派遣しています。

4月中旬からは、地元の医院、薬局も機能しはじめ、避難所の患者さんを受入れることができるようになりはじめたことと、各避難所から地元医院への患者輸送バスが運行を始めていることから、医療救護班と地元医療への引継ぎを考える時期となってきました。

山田高校での常設救護所は5月13日をもって撤収され、その後は「県立陸中海岸青少年の家」に活動拠点を移し、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県支部が交代で、青少年の家での診療と巡回診療へと形を変えました。

この青少年の家は、当初体育館を避難所として使用していましたが、山田町、大槌町地域から440名の児童を受入れ、小学校として使われることとなり、避難していた約120名の被災者の皆さんは同施設の宿泊棟へ移り生活を送られています。

ここでの活動は、午前には青年の家の被災者の皆さんの診療に加え、一部屋ごとを訪問し、こころのケアにもあたりました。午後は山田高校への巡回診療へ向かい、引続き医療救護、こころのケアに努めました。

震災発生から3カ月が経とうとしています。被災地の市街



被災者の皆さんと体操の時間



避難所ではこころのケアも大切

の状況は、車の通る道はあるものの、山積みされた瓦礫、陸地に打ち上げられた船、なぎ倒された家屋など、地震、火災、津波被害の爪痕やにおいは生々しく広がったままです。一日も早い、復旧、復興に向け、日本赤十字社は今後も支援活動を続けてまいります。

一方、兵庫県支部では、岩手県釜石市や山田町への医療救護班の派遣したのをはじめ石巻赤十字病院にも医師、看護師等の医療支援スタッフを派遣し、被災者の皆さんの救護活動にあたっています。

甚大な被害となった宮城県石巻市では、多くの医療機関が



多くの患者を受入れた石巻赤十字病院

津波により浸水、建物の損壊等で診療不能となっていることから、市内で唯一医療機能が維持されている石巻赤十字病院(病床数402床)に被災者が集中。病棟にマットレスを敷き入院増に対応するなど、いのちを支える拠点として活動を続けています。

震災翌日3月12日には779人、13日には1,251人、14日には700人、15日には617人など多くの患者さんが救急搬送されるとともに、1日に100台を超える救急車が押し寄せる中、断らない救急という病院理念を掲げ、被災者の皆さんの診療に全力を挙げています。

が、病院職員もこの震災で大きな被害を受けており、不安から体調を崩すスタッフも出ています。

そこで、姫路赤十字病院や神戸赤十字病院の医師2人、看護師等12人、事務職3人を石巻赤十字病院に、また石巻赤十字看護専門学校に姫路赤十字看護専門学校の教員2人を派遣し、懸命な支援活動を行いました。

東日本大震災
災害報告

救護班からの活動報告

姫路赤十字病院

医師 八井田 豊

2011年4月4日から9日まで石巻赤十字病院の支援活動に行ってきました。私たち応援医師の仕事は赤エリア(重症患者)と黄エリア(中等症患者)のサポートでした。当時の救急患者数は1日平均200人前後、救急車は1日平均80台前後とのことでした。震災から3週間以上たってもなかなか救急患者数が減らないのは、長引く避難所生活で体調を崩す患者が後を絶たないのに加え、周りの病院が壊滅的な被害を受けていたためと考えられました。

私は麻酔科ということで赤エリアの担当になりました。勤務体制は3交代制(日勤、準夜、深夜)で、各時間帯ともに上級医、後期研修医、初期研修医からなる数人のチームで構成されていました。時間帯によっては、救急車が立て続けに3~4台来ることがあり、確かに応援が欲しいという気持ちがよくわかりました。患者は虚血性心疾患、心不全、不整脈などの循環器疾患や肺炎、喘息発作などの呼吸器疾患が多く、意識障害などの脳神経疾患もみられました。黄エリアでは頭痛、腹痛、腰痛などストレスに起因する症状の患者が多かったようです。それでも患者は日に日に減少し、通常診療モードに移行しつつあった矢先の4月7日の夜、震度6の地震がありました。病院の正面玄関には再びトリアージエリアのテントが立ち、緑、黄、赤のエリアが設置され、一気に災害モードに戻りました。幸



い被害は少なく、患者数もそれほど増えなかったのですが、「これがいつまで続くのか」という心理的ダメージが大きかったように思います。

被災地の病院支援に際し、絶対に忘れてはならないのは「病院のスタッフも被災者」ということです。できるだけスタッフの手を煩わせないような自己完結型のサポートでなければなりません。積極的に声をかけ、自分は何が専門で、どういうサポートができるのかを伝え、スタッフが遠慮なく頼めるような人間関係を構築することが重要です。そして、少しでもスタッフが心身共に安らぐことができれば、それこそが病院支援といえるでしょう。

最後になりましたが、被災された皆様の1日も早い回復を、心よりお祈り申し上げます。

神戸赤十字病院

医師 松井 隆

私たち第6陣は3月28日~4月1日の期間活動を行いました。花巻空港で第5陣と引き継ぎを行ったところまではよかったのですが、乗り継いだワゴン車がまさかのエンスト。目的地にさえたどり着けずに引き返すことになるのか!夜になり雪も降り始めた中、地元ホンダ営業所の方に助けていただき何とかリスタート、救護班が助けられてどうする?翌日、釜石に到着し無事、活動を開始することができました。一緒に活動することになった静岡赤十字の救護班には偶然後輩がボランティア参加していたこともあり、すぐに打ち解けることが出来ました。

発災からすでに2週間以上が過ぎていたため、津波の被害のなかった救護所周辺はやや落ち着きを取り戻しており、医療ニーズも減りつつありました。

一方で、我々は医療機関も含め壊滅的な被害を受けた大槌町の巡回診療も担当しました。釜石市内と異なり携帯が通じず、避難所との連絡が非常にとりにくい状況でした。再三「また、来てくれるのか。次はいつ来るのか」ということを聞かれ、避難されている方は不安や孤立感を強く感じられておられるようでした。次回訪問の時間を約束して



定期的に回るようにしました。

担当外でしたが、手薄になっているという情報を得、釜石小学校にも赴きました。ここには近くの救護所にさえ行くことのできない高齢者が多くおられ、最終日の出発ギリギリまで活動させていただきました。

やり残したこと、出来なかったこともたくさんあったと思いますが、救護員自身が疲弊しすぎず、みんながもう一度救護活動を行いたいという気持ちをもって帰路につきました。県のワゴン車は帰りもご機嫌斜めで、武蔵野赤十字の車を借りることになりましたけど。

柏原赤十字病院

医師 三村 令児

私たち柏原・多可赤十字病院合同班は、5/18～5/22の4泊5日で山田町での医療救護活動を行いました。この時点での状況は、5/10までは、山田高校を兵庫赤十字班が、山田青少年の家を大阪赤十字班が担当していましたが、4月半ばから、地元開業医が4ヶ所で診療を再開しており、また避難所での受診者の減少と急性期から慢性疾患への需要の変化から、5/10以降は、山田高校と青少年の家の2ヶ所を近畿ブロックで順に担当する事になっていました。私たちは、京都赤十字班との交代でした。赤十字が5/26をもって山田町から引き上げる事が既に決まっておりましたが、この時点でも町の惨状は報道以上に悲惨であり、津波の傷跡は生々しく、依然山田高校には350名の避難者がおられ、町内最大の避難所であり、青少年の家には116名と第2の避難所で、その2ヶ所を私たちが担当していました。山田高校では、いまだ隣人との区切りは腰までの高さしかない段ボールで、いつでも衛生環境の悪化が起りかねない状況が続いています。診察に来られた女性の1人が、私は、私の両親が津波に流され、主人の両親も津波に流され、自分の家も津波に流されてしまいました。「出来る事なら、3月10日に戻りたい」と、言われた言葉が忘れられません。

しかし、人々は震災の傷に負けてはいません。私たちが



訪れたこの時期には、既に主要な道路は復旧し、多くの車が行き交い、重機が、がれきの撤去を行っていました。人の強さ、日本人の団結力を感じてすごくうれしかったのも事実でした。

私がもうひとつ感じた事は、医療支援に来て、被災者の方々に医療援助をしながらも、患者さんを診る事、困っておられる方々の助けになる事、出来る事はなんでもさせてもらう事、それは、山田町であろうと、柏原であろうと、「どこにいても何も変わらない」、という事でした。

最後に、この4月から、初めて赤十字病院に赴任し、医療救護など初めての私を支えてくださった、多可・柏原両赤十字のスタッフの皆様へ感謝いたします。

理学療法士 石原 直幸

5月18日～22日の5日間、第20救護班の一員として岩手県山田町の山田高校・陸中青少年の家での診療活動に参加させて頂きました。被災地での活動に参加させて頂くのは初めての経験で、主事として理学療法士として自分の役割を果せるのか不安を抱いての参加となりました。

花巻空港からバスに乗り、海岸線の釜石までは、病院のある丹波市より少し遅い田植えの光景が広がり、少し緊張が緩んだことを覚えています。しかし釜石から海岸線を山田町に向かって走ると景色は一変し、テレビで見る被災地の悲惨な光景が、映像ではなく、現実として目の前に広がり、バスの中では会話が途切れ、皆一様に押し黙りただ窓の外を眺めていました。

主事としての役割は、慣れてくると十分果たせたと思います。ただ宿舎に帰ってからの各種報告書の作成には、引き上げ前日の夜まで苦戦を強いられました。

一方、理学療法士の活動においては、情報収集及び伝達の困難さと重要性を改めて認識させられました。引き上げ日の朝、偶然兵庫県の引継ぎファイルが見つかり、その中には1ヶ月前、山田高校でリハビリを受けた人の名前・内容等の記載がありました。交代を繰り返す救護班の中で理



理学療法士を含まない班、兵庫県支部以外の救護班との引継ぎの中でこのファイルは引き継がれる事なく置き去りにされていたようです。今回の震災のように救護活動が長期にわたり、寝たきり・廃用障害予防の為、理学療法士が派遣されるようなケースでは、心のケア・薬品情報等と同様にリハビリの情報が引き継がれていく事の重要性を痛感しました。

今回の経験を次回の救護活動に、また、日常業務においても生かしていきたいと思っています。貴重な経験をさせて頂きありがとうございます。

多可赤十字病院

看護師長 佐藤 博美

4日間、私は山田高校と青少年の家で、こころのケア要員としての活動を行いました。山田高校は以前から兵庫県の救護班が介入していたため、初日から喜んで下さったことに驚き、過去の救護班の関わりの成果であると感じました。青少年の家では1～2日は挨拶と体調を伺うことしかできませんでした。3～4日目には震災当日から今後のことなど多くのことを話して下さるようになりました。ある一人の女性は、「夫が行方不明、他の人は葬儀を済ませているのに自分だけが取り残されている」と話され、私はただ傾聴するだけしかできませんでした。表情が暗く気がかりでしたが、帰りのバスの中で見たその女性は、部屋の窓から手を振って見送りをして下さいました。私達の関わりはこれでよかったのだと思うことができました。

健康生活支援講習の指導員として、セラピューティックケアをしながらコミュニケーションを図り「身体が暖かくなった」と喜ばれました。体育館では『上を向いて歩こう』の体操をレクリエーションの一環として行い、「身体を動かすことはよい」と多くの方が立ち上がり参加していただき、うれしく思いました。

避難所では様々な支援の手は広がっていると感じまし



た。役場での医療班ミーティングに参加し、行政側と支援者側の思いの相違や課題に触れることもできました。まもなくこの地域で赤十字が撤退していくという中で、地域につないでいく役割があり、担当看護師と連携を図ることを意識しながら活動をしました。

こころのケア要員の重責を感じましたが、明るく楽しい柏原日赤と支部のチームメンバーに、私自身もこころのケアを受けながら業務が遂行できたことに感謝します。

先の見えない避難所生活、畳1枚の生活空間、厳しい環境の中で「辛いのは自分だけではない、みな同じ」とがんばっておられる被災者の生き様、温かい心に触れた救護活動でした。

姫路赤十字看護専門学校

専任教師 藤元 由起子

東日本大震災で、石巻赤十字看護専門学校は津波により大きな被害を受けました。赤十字本社の要請により、全国の赤十字施設から病院・学校の支援要員の第3班として、3月26日～3月30日の5日間、石巻赤十字病院の中に設置された「石巻赤十字看護専門学校復興対策室」で活動しました。

東京の本社から石巻赤十字病院までは、バスで移動しました。移動日、出会う人々が、救護服の私に「頑張ってください」「ご苦労様です」と声をかけてこられました。皆さんが、赤十字に注目し、応援してくれていると感じました。

石巻赤十字看護専門学校の支援要員としては私達をはじめで、京都第二と和歌山の教員2名と共に活動しました。被災された学校の先生方が、学校内や周辺に流された書類等を大事に拾い集めてこられたものを、パソコンに入力しました。入力する書類は、泥水で湿気ていたため、乾燥させてから、泥で隠れているところをブラシで取り除いたりしながら行いました。私達が直接学校に行かせていただくことはありませんでしたが、被害の凄まじさが伝わってきました。

先生方から、大震災の時の様子を聞かせていただきました



た。看護学生は、授業中に津波に襲われ、近隣の小学校に避難しました。逃げる最中にお年寄りを背負って一緒に逃げたそうです。列も乱さず避難した様子や一緒にいる人や環境への配慮など、人を思いやった学生の活躍に先生方も感銘をうけておられました。赤十字の精神が脈々と受け継がれていると感じました。

また、被災地の先生が、救護服の私達をみて「本当にこの服を見るだけで心強い。ありがとう。がんばります」と涙ながらに話されたのが印象的でした。石巻赤十字病院に、北は北海道から南は沖縄まで、日本全国から様々な人が支援に駆けつけている様子を目の当たりにして、赤十字の団結力やネットワークの凄さを実感しました。今後も全職員、学生、皆で力を合わせて被災された方々をサポートしていきたいと思ひます。

住野 日出世

防災ボランティアリーダーの住野氏は、ボランティア輸送シャトル便ドライバーとして3月29日、30日、また、本社ボランティアセンター要員として4月4日から7日まで活動されました。



・地震のゆれの違い

私が体験した阪神淡路大震災のゆれは、まるで地面から突き上げるようなものでした。下で何かが発射したのかと思いました。時間も長くて30秒ほどかと思っています。今回の地震を体験した方に伺うと、地面がゆっくり横に動き、初めは地震と思わなかったそうです。3分から5分のゆれで、いつ止まるのかという恐怖に襲われたそうです。

また、阪神淡路の場合、余震がありました。規模の小さいものでした。しかし、今回の地震は、余震が長期にわたり、また大きな揺れが続いているのが被災者には大変精神的に辛いものだと思います。

・津波の被害

支援現場から帰ってきたボランティアに伺ったことですが、道路を一つ隔てて、一方は全ての建物が流されて何も無い、片方は何もなかったように普通の街の風景であったそうです。そして、その境目に瓦礫の山があったそうです。

テレビの映像などから、ある地域が全部被災しているように受け取りがちですが、被害の軽重があることを理解し、支援の仕方にもきめ細かさがあること、ニーズは多様であることを知らなければいけないと思います。

災害救護活動の他にも

奉仕団、青少年赤十字等、様々な事業が行われています。

川西赤十字 奉仕団

川西市赤十字奉仕団大会

4月25日、川西市役所で、第54回川西市赤十字奉仕団大会が開催されました。

奉仕団員等約50人が出席。奉仕団信条朗読に続き、岡田奉仕団委員長が挨拶され「明るい社会のために、赤十字奉仕団として頑張っていきたい」と、抱負を述べました。

川西赤十字 奉仕団

ナイチンゲール生誕祭

5月12日、川西市赤十字奉仕団が、川西市花屋敷のナイチンゲール像前で、ナイチンゲール生誕祭を開催しました。

岡田奉仕団委員長、川西市地区長はじめ参加者約100人が、雨が降りしきる中、献花を行いました。

姫路市地区

平成23年度姫路市地区赤十字のつどい



有馬姫路市赤十字奉仕団委員長の挨拶

5月10日、イーグレひめじ あいめっせホールにおいて奉仕団員約200人が参加して「平成23年度姫路市地区赤十字のつどい」が開催されました。

つどいは赤十字奉仕団員信条の朗読に始まり、石見姫路市地区長、有馬姫路市赤十字奉仕団委員長並びに日本赤十字社兵庫県支部支部長の挨拶と続き、参加した奉仕団員の方々に赤十字の活動について、さらなる理解を深めていただくつどいとなりました。

高等学校 青少年赤十字

兵庫県高等学校青少年赤十字 春季リーダーシップ・トレーニング・センター

テーマは ～「健康・安全」～



平成23年3月26日(土)から28日(月)まで、兵庫県高等学校野外活動センター(明石市)において、兵庫県高等学校青少年赤十字春季リーダーシップ・トレーニング・センターを開催しました。県内6校から高校生の青少年赤十字メンバー20人、ほか指導者、兵庫県青少年赤十字賛助奉仕団員、神戸青年赤十字奉仕団員らの計33人が参加。

2泊3日の集団生活。それぞれ異なる学校の生徒たちが、心肺蘇生法やAEDを用いた除細動などの一次救命処置を体験し、いのちを守ることの大切さを学びました。

また、グループワークやボランティアサービスでは、生徒たち自身が、今必要なことを発見し、それについて考え、実行することで、「自主性」を養いました。緊張と楽しさの入り混じった3日間となりました。

神戸市立 有野中学校

～勇気をだして、いのちを救うために～ 神戸市立有野中学校(健康・安全プログラム)

5月2日、神戸市立有野中学校でAEDを使った心肺蘇生法を実施しました。

2年生140人が参加。万一、毎日の生活の中で、友達や家族が目の前で倒れたら・・・生徒たちは練習用人形に戸惑いながらも、勇気を出して手当が行えるように、胸骨圧迫やAEDの使い方を学びました。



一次救命に取り組む生徒たち

赤十字 加盟式

平成23年度兵庫県高等学校青少年赤十字加盟式・生徒協議会例会(第1学期)

5月8日、当支部7階大会議室で、兵庫県高等学校青少年赤十字加盟式・生徒協議会例会を開催しました。

8校から生徒39人と指導者らが参加。生徒協議会例会では「東日本大震災に対して高校生が何をできるか」をテーマに、生徒たちは自分たちにできることを考えました。

「被災地に物資を送る」「避難所で、子供の世話やお年寄りの話し相手をする」など、生徒たちの意見がたくさん挙げられました。そしてこの先、東日本の被災者の皆さんへどうすれば自分たちの思いが形になるのか、実現に向けての計画を立てることが宿題となりました。

研究協議会

平成23年度 兵庫県青少年赤十字研究協議会(総会)

5月17日、当支部7階大会議室において、兵庫県青少年赤十字協議会研究協議会(総会)を開催し、加盟校関係者等、20人が出席しました。

研究協議会の研究の部では兵庫県教育委員会教育企画課の圓田元彦先生から「青少年赤十字研究会」、丹波市立氷上中学校の尾松正章先生から「マレーシア赤新月社とのメンバー交流事業」の報告がありました。

また、平成23年度研究推進校が決定しました。

篠山市立城南小学校、西脇市立西脇小学校、市川町立瀬加小学校、市川町立鶴居小学校、上郡町立山野里小学校、佐用町立幕山小学校、播磨町立蓮池小学校、姫路市立神南中学校、兵庫県立舞子高等学校



赤十字運動月間

神戸まつり

神戸まつり「おまつりパレード」に参加



けんけつちゃんも参加して 東日本にエール

～「私たちの力を東日本へ！」被災者へ応援メッセージ～

5月15日、毎年5月の『赤十字運動月間』中のキャンペーン活動の一環として、赤十字活動への理解と協力、参加を呼び掛けるため、「おまつりパレード」に参加しました。

今回は3月11日に発生した東日本大震災の被災者の皆さんへ、阪神・淡路大震災の被災地神戸からエールを送る「神戸から愛と元気を」をテーマに開催され、当支部も岩手県で行った医療救護活動を、車両全面の看板に張り出し、応援メッセージを流し、パレードしました。

青少年赤十字メンバーや赤十字奉仕団員、看護学生、県内各赤十字施設の職員など総勢96人が楽しく元気に行進し、赤十字活動を力強くPRしました。